



日本全国  
能楽  
キャラバン

# 新春 碧水園能楽堂特別公演



## 能安宅 石橋

連獅子 瀧 勲  
子 流 進 敏

喜多流 観世流

日本全国能楽キャラバン！ in 宮城

令和4年

1月16日(日)

観世流公演 14:45 開場  
15:30 開演

1月23日(日)

喜多流公演 14:45 開場  
15:30 開演

料金 全席指定(税込) S席 ¥6,500 / A席 ¥6,000 / B席 ¥5,500

前売開始 令和3年11月29日(月) ※2公演の通し券はございません。

- ・公演に関するお問合せ：公益財団法人十四世六平太記念財団 Tel. 03-3491-8813 (10:00 ~ 18:00 休館日あり)
- ・チケットに関するお問合せ：河北チケットセンター Tel. 022-211-1189 (平日10:00~14:00)
- ・公演詳細：日本全国能楽キャラバン！特設サイト▶▶ <https://www.nohgaku.or.jp/caravan2021>

主催：公益社団法人能楽協会・公益財団法人十四世六平太記念財団  
共催：河北新報社  
後援：白石市・白石市教育委員会  
協力：公益社団法人観世九草会・白石皐風会・白石喜多会



文化庁 大規模かつ質の高い文化芸術活動を核としたアートキャラバン事業

### チケット購入のご案内

— お申し込み・お問合せ —

河北チケットセンター  
022-211-1189

営業時間 平日 10:00~14:00  
土・日・祝日休

- ・電話受付のみ承ります。
- ・お申込み後のお席の変更・キャンセルはできません。

### お支払い・チケット発送について

- 宮城県内のお客様  
代金引換  
お近くの河北新報販売店の担当者がお届けします。  
事務処理手数料として200円ご負担いただけます。
- 宮城県外のお客様  
宅配便での発送(代引決済)となります。  
送料と代引き手数料をご負担いただけます。  
※チケット代金、お届け先により異なります。

### ご注意

- ・開演中の途中入場はお断りいたします。
- ・未就学児童のご入場はご遠慮ください。
- ・やむを得ない事情により出演者が変更になる場合がございます。
- ・許可なき写真・ビデオ撮影、及び録音はお断りいたします。
- ・客席での携帯電話やスマートフォンなど音や光の出る電子機器のご利用はお断りいたします。
- ・「能サポ」をスマートフォンでご利用になる際は必ずマナーモード、機内モードの設定をお願いいたします。
- ・当面のあいだ水分補給を除き、飲食はご遠慮くださいますようお願いいたします。
- ・碧水園能楽堂は全館禁煙です。
- ・お席を離れる場合は貴重品、お手回り品にご注意ください。盗難・紛失についての責任は負いかねます。
- ・係員の指示に従っていただけない際には退場していただく場合がございます。

本公演は、政府、公益社団法人全国公立文化施設協会などが定めるガイドライン、また宮城県の「新型コロナウイルス感染症の拡大防止チェックシート(イベント用)」を踏まえ対策を施しております。  
ご自身の身近に新型コロナウイルスに感染した方、またはその可能性がある方がいらっしゃるお客様のご入場はお断りいたします。  
ご来場の際は、マスクの着用をお願いします。  
会場入り口で手指の消毒、検温を実施させていただきます。  
体温が 37.5℃以上の方、あるいは体調の悪い方のご入場はお断りさせていただきますことがございます。



当公演は字幕解説「能サポ」をご利用いただけます

- ・お手持ちのスマートフォン、タブレットに舞台上演に合わせた字幕解説が自動的に表示されます(日本語・能のみ)。
- ・事前にQRコードから「G・マーク」アプリ(無料)をダウンロードしてください。
- ・当日ロビーでのご案内もいたします。

<http://www.g-marcapp.com/>

- ※公演中は必ず機内モードにしてご利用ください。
- ※周りのお客様へご迷惑にならないようご配慮ください。



### 観客席御案内

S席 6,500円  
A席 6,000円  
B席 5,500円



### 会場案内図



### 碧水園能楽堂

〒989-0248 宮城県白石市南町2-1-13

TEL/FAX: 0224-25-7949



- ・東北新幹線 白石蔵王駅 タクシー5分
- ・東北本線 白石駅 徒歩20分・東北自動車道白石15分

※「神歌」開演後、解説になるまで見所への出入りはお断りいたします。

素謡 神歌 翁 観世喜正 千歳 小島英明  
解説 小島英明

仕舞 景清 観世喜之  
屋島 駒瀬直也  
金子仁智翔  
遠藤和久  
弘田裕一  
河井美紀

狂言 鬼瓦 シテ・大名 石田幸雄 アド・太郎冠者 岡 聡史  
後見 破石澄元

休憩(十五分)

子方・源義経 小島史織  
ツレ・岡山 佐久間二郎  
ツレ・岡山 長山耕三  
ツレ・岡山 桑田貫志  
ツレ・岡山 奥川恒成  
ツレ・岡山 石井寛人  
ツレ・岡山 中森健之介  
ツレ・岡山 永島 充  
シテ・武蔵坊弁慶 小島英明

能 安宅 ワキ・富樫兼 森 常好  
大鼓 柿原 光博  
小鼓 幸 正昭 首 八反田智子

後見 観世喜之 遠藤喜久  
奥川恒治

鈴木啓吾  
中森貫太  
観世喜正  
駒瀬直也  
中所宜夫

附祝言

終了予定時刻 十八時十分頃

※「翁」開演後、解説になるまで見所への出入りはお断りいたします。

素謡 翁 翁 中村邦生  
千歳 友枝真也  
金子龍晟  
大島輝久  
谷 友矩  
友枝雄人  
佐藤寛泰  
狩野了一  
友枝雄太郎  
内田成信

狂言 萩大名 シテ・大名 野村太一郎  
アド・太郎冠者 野村遼太  
アド・亭主 竹山悠樹  
後見 破石澄元

休憩(十五分)

仕舞 西行桜 佐々木宗生

塩津圭介  
内田成信  
大島輝久

能 石橋 ツレ・赤獅子 佐々木多門  
後シテ・白獅子 塩津哲生  
前シテ・権翁 香川靖嗣  
ワキ・祝明法師 森 常好  
大鼓 國川 純 太鼓 小寺真佐人  
小鼓 鶴澤洋太郎 笛 松田弘之

アイ・山の精 野村裕基

後見 佐々木宗生 中村邦生  
塩津圭介

佐藤寛泰 友枝雄人  
大島輝久 大村 定  
内田成信 出雲 康雅  
友枝真也 狩野了一

終了予定時刻 十八時頃

素謡「神歌」(かみうた)「翁」(おきな)

※観世流は翁の素謡を「神歌」と書き表します。

天下泰平国土安穩、五穀の豊かな稔りを祈る神の詞と舞が進行してゆく、謹厳なる式事の内容となつていきます。

「能にして能にあらず」とされて能の全曲中、最も神聖視されているため、舞台上上がるものは皆潔斎し、清浄なる身でこの曲に臨みます。

「翁」上演中は絶対であり、お客様の途中からの入場はお断りしなければなりません。番組には必ず冒頭へ置くように扱われ、年頭等の節目や舞台開き等の祝賀の折に演じられるのです。

仕舞「景清」(かげぎよ)

日向国(宮崎県)に流された平家の勇士、悪七兵衛景清。盲目となった老身ながら在りし武勲を追想して気概を示す。

仕舞「屋島」(やしま)

源平の運命をかけた屋島の戦いを勝ち軍に導いた源義経。その靈魂が昔日の戦さを語り舞う。

狂言「鬼瓦」(おにがわら)

長らく在京していた大名が、無事訴訟も叶い帰国することになる。これも日頃信仰している因幡薬師のおかげと、お礼と暇乞いのため太郎冠者を連れ参詣に出向く。お参りを済ませた二人がお堂の様子を見て回るうち、ふと見上げた屋根の鬼瓦が目に残まる。すると大名は急に泣き出してしまい…

このぼのとしたユーモアのある、味わい深い狂言です。大名や太郎冠者とともに、お寺を見て歩いているような気分でご覧ください。

能「安宅」(あたか)

平家を滅ぼした源義経は兄の頼朝と不和になり、都を去って奥州平泉へと逃れることになりました。山伏姿に変装した義経一行は、加賀の安宅の関へとさしかかります。関守の富樫は頼朝の命令によって、山伏を特に厳しく取り調べているとのこと。用心して関に入りますが、一行に対して富樫は怪しみの目を向けて通行を阻みます。弁慶の機転で東大寺大仏再建の寄進を募っているのだと言うと、富樫はそれならば勸進帳を読めと迫まってきました。持っていた巻物を勸進帳と偽って見事に読み上げる弁慶。さらに、見咎められた強力姿の義経を金剛杖で打ち据える弁慶の気迫に、富樫も関の通過を許します。関を無事突破し、安堵する一行の前に、富樫が酒を持って先ほどの非礼を詫言にやってきました。弁慶は油断せぬように盃を受けつつ舞を舞って興を添え、機を見て一同と奥州へと下って行くのでした。

緊迫の場面が連続するなか、弁慶の機知と主君・義経への思いが見るものの心を揺さぶります。その後の日本の演劇に多大なる影響を与えた名曲です。

狂言「萩大名」(はぎだいみょう)

近々都から帰国することになった田舎大名が、太郎冠者の案内で、とある庭園に萩の花見に出かける。風流者の亭主が、来客に必ず一首所望することを知っている太郎冠者は、「七重八重 九重とこそ思ひしに 十重咲きいづる 萩の花かな」という聞き覚えの歌を大名に教えておく。見事な庭を楽しんだ後、いよいよ歌を詠むことになるが、大名は…。大名を風刺するだけでなく、無邪気で大らかな人物として描くところに狂言らしさがある作品。

仕舞「西行桜」(さいぎょうさくら)

閑かな春の夜、老桜の精が西行法師の前で、都の名所を述べながら清興を惜しみつつ舞を舞う、風雅の世界。

能「石橋」(しやつきょう)

大江定基という貴人が出家し寂照法師と号し、日本より入唐渡天して仏教の聖跡を拝み巡るうち、清涼山へと到ります。その麓の深い谷に掛かる石の橋を渡って靈地に赴こうと在所の人を待っていると、一人の木樵が現れて、この橋は文殊菩薩の浄土に通じますが安易に渡ろうとしてはなりませんと戒めます。もとより人が掛けた石橋ではなく、幅は一尺(30cm)より狭く、石の上には滑らかな苔が生えて滑りやすく、長さは三丈(30m)であるが、谷の深さは千丈(3km)より深く、並大抵の修行の心得では渡ることはできないのです。木樵はさらに橋の由来を語り、向かいには文殊の浄土であるから今に奇瑞があるでしょうと予言して立ち去ります。

果たしてその言葉の如く、やがて迎いはただならぬ静けさとなり、文殊菩薩の乗り物である獅子が石橋の上に豪快に出現。咲き乱れた牡丹の花に戯れつつ勇壮華麗な威勢を示して、なびかぬ草木もない泰平の世を祝福して舞い取め、獅子の座へと帰ってゆきます。

※素謡とは、能の謡を囃子を入れずに、面装束も付けないで座して謡う演式です。

※仕舞とは、能一曲の見せ場の面白い部分を、紋付き袴の姿で舞う舞で、能面も装束も着けません。ですから能のデッサンとも言えます。